

CAGLIERO

カリエロ11 サレジオ会 宣教ニュース

N.126 - 2019年6月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信

親

愛なる会員、友人の皆さん、

私たちは引き続き教皇フランシスコと共に、すでに第四の幸いに入っています：「義に飢え渴く人々は幸いである。その人たちは満たされる。」

「飢えと渇きをもって正義を求める、それが聖であるということです。」（『喜びに喜べ』79）

それは、多くの若者が質の高い教育を保証されない状況があるということだけではありません。持続可能な開発目標（国連、アジェンダ2030）の4番目も、この方向を示しています。サレジオの宣教活動は、教育という形に具現される、真剣な、創意工夫豊かな取り組みという特徴を常に持ってきました。サレジオの宣教師が「人間の尊厳にふさわしい社会を建設するすべての人びとに協力する」（会憲第33条）その典型的なあり方を表すのは、特にこの取り組みにおいてです。ドン・ボスコは今日、世界の正義と平和のために働く心構えのあるサレジオ会宣教師を必要としています。カルカッタのマシュー・タイバランビル修士（2019年2月1日帰天）のようなサレジオ会員です。マシューは、40年以上にわたり、大いなる粘り強さと創意工夫をもって、社会から落ちこぼれた何千人もの若者たちに奉仕しました。サレジオ会員の王道はほかでもなく、若者の教育です。義に飢え渴くサレジオの宣教する教育者です！ 飢えと渇きをもって正義を求める、特に若者の教育を通して。ここにサレジオ会宣教師の特徴があります。

J. Basanes

宣教顧問 ギジェルモ・バサニエス神父



日本で宣教師として働く、何となく喜び！

日

日本で宣教師として働くのは難しいということをよく耳にします。目に見える実りの喜びがないから、と。確かにそうです。私自身、日本の宣教は難しいと認めます。しかし、喜びや目に見える実りがないということには同意できません。

私は何年も前から、それぞれ10人から15人くらいの二つのグループに同伴しています。グループの人々はさまざまなきっかけで教会に来て、カテキズムのクラスに参加しています。ほとんど全員が求道者になり、ちょうど良い時が来たとき洗礼を受けます。神を知らず、神が私たちが幸せにするために人となられたことを知らないけれども、知りたいと強く願う人を育て、同伴するのは、長い道のりです。しかし、感動的で、喜びに満ちた冒険です。忍耐が必要ですが、実りがあります。なぜ

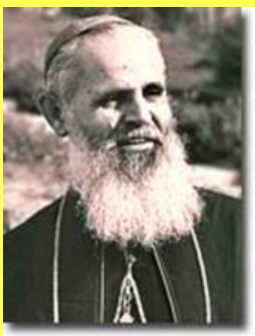
なら、宣教師ができないことを、主の恵みが果たしてくださるからです。

人々に耳を傾けることは大切ですが、確信と喜びをもって、いくらかの技も使い、そしていつも満面の笑顔で良い知らせを差し出すことが肝心です。多くの日本人は物的なパンを必要としていませんが、霊的な糧をより必要としているのです。

イエスとそして隣人と親しい一致のうちに生きるすばらしさを伝える情熱を、宣教師がもっているなら、日本の宣教はそれでも難しいと言うかもしれませんが、宣教師としての喜びが無いとは決して言えないでしょう。たとえ目を見張る成果がなくても。



アキレ・ロロピアナ神父（日本管区 宣教促進担当者）



サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ピエルルイジ・カメロー二神父

神の僕オレステ・マレンゴ司教（1906 - 1998）はインド北東部で働いた偉大な宣教師、三つの教区を設立しました。1923年、フォリッツォで修練期を過ごしました。インドの宣教地に派遣される予定だったある神学生が亡くなった際、オレステはその神学生の代わりに宣教地に赴く許可をもらいました。「それは私の人生の最大の望みでした。私は宣教地で使徒職に生涯をささげることを条件にサレジオ会員になることを願ったのです。世界中のどこに派遣されても構いませんでした。」オレステは派遣された開拓者たちの中で最も若く、まだ17歳でした！ 彼はイエスのこの言葉に触発され、聖性の道を生きました：「はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」（マルコ10・15）

待つことができる……



2015年8月、ドン・ボスコ生誕200周年の祝いでのことです。Ad gentesすべての人への宣教の呼びかけが自分のうちにますます強くなるのを感じました。私はそのとき、フィリピン北管区の宣教促進担当者でした。宣教の使命に心を奪われ宣教師となるよう人をすなどっていた私自身が実は餌に喰いついていたとは、気づきませんでした。まもなく私は、自分自身の最初の収穫となりました。

私は出会ったサレジオ会宣教師たちから影響を受けました。特に、故ピーター・ザーゴ神父とルイス・イリアルテ神父に感銘を受けました。二人のやさしさと思いやりを体験しました。自分の目で、彼らの熱意と喜びを見ました。特に私がドン・ボスコ・トンドの若い生徒だった1980年代のことです。2016年、私は祈りのうちに神にささやきました。「はい、主よ、あなたの宣教師としてお遣わしてください。」私はドン・ボスコから本当にたくさんのものをもらいました。これが私のお返しでした。「ありがとう、ドン・ボスコ。そして誕生日おめでとう！ ささやかな贈りものとしてこれをあなたにささげます。」それまで私は、宣教師たちの大いなる善良さと惜しみない広い心の、多くの受益者の一人だったのです。今私は、それを人々に伝えていくために呼ばれた少数の一人であると感じています。あたかも神が私に言って来られたかのよう

に。「ラモン、返済の時間だよ！ こんどは宣教師として、与えるほうになりなさい。」

こうして2017年8月、45歳のとき、私はマレーシア、サラワクのクチン大司教区に宣教師として派遣されました。私と一緒にここに任命されたのは、東チモール出身のアンドレ・ベロ神父とスペイン出身のマヌエル・ルペレス修士です。第148回宣教派遣の仲間の宣教師たちは、さまざまな国へと出かけて行きました。私たちは聖ヨハネ・ボスコの精神のうちに神の弟子として生きるため、マレーシアのこの場所にやってきました。

計画では、大司教区が所有する技術訓練校を、地元の貧しい若者のため私たちサレジオ会が運営するというものでした。しかし、理解できる理由から、計画は現在、実現にはほど遠い状況にあります。クチンの大司教の要請で、学校の創立を待つ間、大司教区のさまざまな奉仕職を手伝う務めを私たちは管区長から与えられました。私たち司祭二人は大司教区の青少年委員会で奉仕しています。周りの小教区の手伝いもしています。特に、ミサ、秘跡の奉仕、養成のさまざまな活動にたずさわっています。マヌエル修士は、クチン市のカトリック学校、聖ヨセフ・インターナショナル・スクールで教鞭を執っています。

私たちは2017年以來ここマレーシアにいますが、ここでの私たちサレジオの拠点はまだ確立されていません。兄弟として共に暮らし、共に祈ることのできる、サレジオの教育と福音宣教を通して若者に仕えることのできる、自分たちのものと言える家も学校も、まだありません。それでも私たちは、希望にとどまっています。祈り、信頼し、ゆだねています。神の時が来れば、恵みによって、マリアの取りなしを通して、すべてうまくいくと。恋に落ちて心をすっかり奪われた人が言ったりしったりするように、「**私たちは待つことができる……どんなことがあっても。**」

私は神の招きに「はい」と応え宣教師になるまで、45年かかりました。神は惜しみなく待っていてくださいました。ここにサレジオの宣教拠点が確立されるまで、同じ45年もかからないことだけ願っています。しかし、神が何をいつ行われようとも、私も惜しみない心で待ちたいと思います。

フィリピン出身、マレーシアの宣教師 **ラモン・G・ボルハ, SDB**

ヨーロッパにおける、修道士、司祭としてのサレジオ会員の召命のために



サレジオ会の宣教の意向

サレジオの使命の豊かな収穫のため、主が聖なる多くの召命を送りつけてくださいますように、そしてすでに呼ばれた者たちに、堅忍と聖性をお与えくださいますように。

奉仕職、カリスマ(教会を築き上げるための聖霊の賜物)、そして召命において豊かな教会とサレジオ家族ととり、兄弟愛を実践する共同体でドン・ボスコのカリスマを生き、活気づける奉獻された人々は、なくてはならない存在です。その共同体は、神の絶対的首位性と、若者への奉仕に全面的に献身する生き方をあかしします。特にヨーロッパで、若者のために神の愛のしるしとなる、新たな惜しみない心のサレジオ会員を遣わすつづけてくださるよう、主に祈りましょう。

